

2025年度第1回中国研究所学術研究会

日 時 4月26日(土) 13:30~17:30

会 場 東洋文庫2階講演室(対面) + Zoom(オンライン)

参加費 無料(中国研究所所員・研究会員以外の方もご参加いただけます)

◇報告1(13:30~15:15)

論 題 末端土司と貴州高坡苗族地域社会——青岩班氏を中心に

報告者 張 勝蘭(法政大学)

【報告要旨】

苗族は中国南部代表的な少数民族である。その祖先は古くから存在する「苗」と呼ばれる集団であるとされている。「苗」は初めて現れた先秦時代から近代まで、常に「漢」と対立する「非漢」的存在として描かれてきたが、その意味合いも指す内実も時代ごとに大きく異なっている。現在、「苗」から一つの民族として識別された苗族は、内部に多様なサブグループを抱えながら、「苗族」としての統一性を再構築している。本発表はこのような苗族と中国王朝・漢人社会との関わりに焦点を当て、貴州の「高坡苗族」というサブグループを事例に、文献・碑文・現地調査のデータに基づき、末端土司である青岩班氏による統治の実態を明らかにする。よって、苗族地域社会の在り方の一端を描き出し、サブグループ次元から苗族の多様性と独自性を読み解く手掛かりを探る。

コメンテーター 西川和孝(明治大学)

◇報告2(15:30~17:15)

論 題 「自由民主」と「ジェンダー保守」の殊途同帰

——現代中国における民主運動と反ジェンダー運動の奇妙な連帯

報告者 郭 立夫(筑波大学)

【報告要旨】

性的マイノリティの人権保障は、自由民主社会の実現の重要な指標とされている。しかし、中国のリベラル知識人や活動家たちは、性的マイノリティの社会運動(同志運動)にあまり関心を示しておらず、むしろ同性愛者やトランスジェンダーの権利に反対する発言を頻繁に行っている。本報告は、海外(主にアメリカ)に流亡している中国のリベラル知識人の主張と活動を事例に、中国の民主運動と同志運動の複雑な関係を探る。本報告

は、天安門事件以降に海外に流亡した一部の中国の民主化を目指すリベラル知識人や活動家たちの言論や行動が、実際には「自由民主」に対する批判的分析や理解に基づいていない、それを政治的動員のためのイデオロギー・ツールに変換していることを指摘する。この自由民主のイデオロギーは一方では運動の参加者に明確な「反共」姿勢を要求しながら、ジェンダーとセクシュアリティの問題においては中国共産党政府の保守主義的傾向を継承している。また、中国の海外民主運動の主要な拠点がアメリカにあるため、これらの知識人や活動家たちはアメリカの政治の影響を強く受けており、「反ジェンダー運動」との奇妙な連携関係を形成している。しかし、本報告はまた、白紙運動が中国の海外リベラル知識生産とアクティビズムの場において重要な転換点であったことを強調する。この転換は、中国のリベラル知識人たちがジェンダー・セクシュアリティの議題において持つ限界を鋭く暴露し、非常に重要な抵抗の意味を持つ。

コメンテーター 福永玄弥（東京大学）

司 会 吉川次郎（中国研究所、中京大学）

参加をご希望の方はこちらの Google フォームからお申込みください（前日正午締切）

<https://forms.gle/aWxr9sFpk5AXQg4T7>

※2025年4月よりこれまでの「定例学術研究会」から名称変更いたしました。